

都市部から離れた孤島に佇んでいる。私は一人で暮らしたい夢を叶えた。それだけで満足だ。都市部にパンデミックが起きていると知った。でも、こんな孤島にまで影響はない、はず。調べようとも、そんな専門な道具はない。だから、私がいなくなることがなければよいだけだ。

私はいつものように岸壁に座る。そして釣り糸を垂らす。魚がなければ食料も調達できないから、仕方ないことだ。

「釣れるかな？」

この時間がいつも私は楽しい。のんびりと誰にも邪魔されない生活だ。だから、ゆったりできるといことは一つの余裕なのだ。特に心の。もちろん、身体も。

でも、時間が経つにつれ顔をしかめる。もう夕方になるのに一匹も釣れない。携帯食料も少ししかない。

「どうしようかな。もしかして魚にもパンデミックが起きているとか？」

わからないが、孤島の中央に聳える屋敷に戻る。釣り糸は急流に流されないようにしておく。もしかしたら、この間にも勝手に引つかかるのかもしれない。

屋敷に住んでいるのはもちろん、私だけだ。でも、諦めたら終わりだと思い、冷蔵庫を開ける。

「あれ？ 食料がこんなにあっただけ？」

誰かが空っぽだった冷蔵庫を充実させてくれた。そう思うしかなかった。だから、考えてみると私以外の誰かがいる。孤島に流れ着いた人がいるのかもしれない。

でも、とりあえず、食料があるのだ。なら、料理をした。そしてゆつくりと咀嚼しながら考えた。

この孤島は都市部からも、もちろん住宅街からも、とにかく離れている。なら船で来た人が無人島と思っているとか？

わからないけど、この屋敷には鍵を掛けてないから侵入されても不思議ではない。

私は食事を終えた。そして洗い物をシンクに水を溜める。勝手に洗ってくれることがあるからだ。

キツチンの窓から夕陽が刺し込まれていた。

「一応、魚見てみようか」

一通り洗い物を終えて、向かった。すると、釣竿を持った女の子が座っていた。

「あら、可愛いお客さんだね。こんにちは、お嬢さん」

女の子は笑っていたらしく、そのまま消えた……？

「あれ？　ここは？」

女の子が座っていた場所に釣竿が残された。私はゆつくりと近づいて竿を取る。

「助けてー」

あまり本気ではない声で岩を掴んでいる。それを見て思った。

なんだか、一人でいることの方が私には合わないのかもしれない。だって。

その女の子を見ている私が最後になるんだろうな、って思ったから。流れてきた女の子は悠々と泳ぎ始めて、そして、空を見上げた。

「お姉さん。もう、都市部は全滅だよ。だから、私は伝えに来たの」

もう、この星にはあなたしかないから。

そして女の子は粒子になって消えた。パンデミックが全てを終わらせた。そう考えた。いつか、私も消えるのだろう。

でも、それでも、私が一人になったということは大きい無人島を手に入れたんだ。なら、探してもいいのではないのか？

女の子が消えたのはきつと魔法使いなんかがいるってことなんじゃないのか？  
そう思うと、心が躍った。

「よし、都市部に戻ろう」

そこで本当の事実を見てから決めよう。

でも、その前に。

「魚、釣れたかな？」

そんなことを思った。